

は思わない。「ティックタック」の言葉で音象徴化されているあの交替音がたしかに聞きわけられるのである。〔中略〕われわれがティックタックの二交替音を聞きわけるとすれば、それはやはり、聴覚内容を拍子づけたり、あるいはじっさいにはわれわれをして拍子づけて聞かしめるそういう動機づけの力がわれわれ自身の中にある⁽¹⁾、それができるだけ単純な音群を形成する働きをなすことに起因するのである。リズムの語源はギリシャ語の Rythmos で流れるという意味である。川の流れ、空気の流れ、車の運行などなど、持続的、継続的な性質を表わす。では前述の拍節とこの持続性はどうか関係ありあってリズムを形成しているのだろうか。クラゲスは車の運行を例にあげて、拍節はわれわれを覚醒させ、リズム体験は睡眠に導びくと言う。即ち、車輪の回転(拍体験)の上のせられて身体(持続性体験)が運ばれて行く。持続性という性質が、拍節によって強められていると考えられる。人間の身体の血行を考えてみよう。心臓の弁の閉鎖により血液はせき止められ、弁が開くと血液が流れ出す。弁の閉鎖により血圧を高め開いた瞬間に体の隅々まで血液が行きわたる。リズムの拍節は弁の開閉であり、持続性は血行であるといえる。リズム感とは、拍節の刻みと持続性とを同時に体験することである。リズムの時間的体験は必然的に空間性を伴う。例えば、投げられたボールが第一点ではずんで弧を描いて第2点に落下するという場面を想定しよう。第1点から第2点に至るまでの時間的経過と、空中に描かれた弧線運動は等しい関係にある。自然に無理なく歩くとき、両肢の長さや歩巾は等しい関係にある。クラゲスは「時間的であって、同時に空間的でない現象、または、空間的であって時間的でない現象は存在しない」と述べている。われわれがリズムを感じるということは身体の運動を伴って確かに感じる事ができるのである。音楽訓練に身体運動を導入して独特の教育法を創案したジャック＝ダルクローズは「リズムの意識は、全身体動きについての反復された経験によってのみ習得される⁽⁴⁾」「筋肉を収縮や弛緩に身体の線を時間と空間の中での拡張や収縮に慣れさせる身体訓練の方法は、拍節感や、リズムに対する直覚力を助けるであろう⁽⁴⁾」と云っている。

II リズム感と抑制力

人間は環境の様々な変化に対処して生きている。音楽活動も刺激に対する反応である。これは神経系の活動によるので、脳がその中心の役割を果している。時実は、刺激と反応の関係⁽⁵⁾を次の図式で説明している。

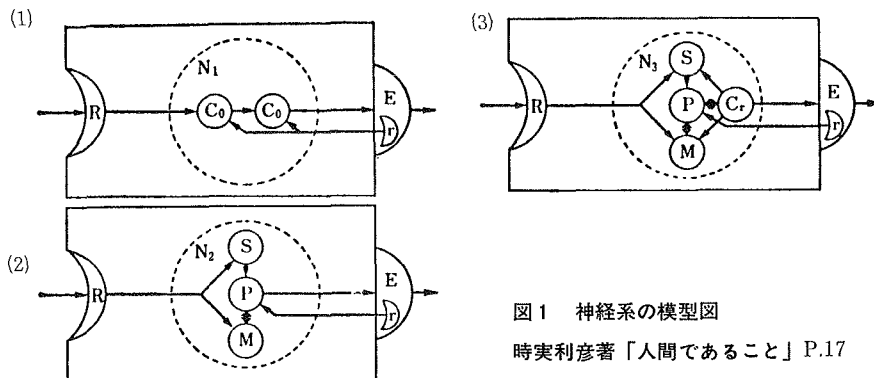


図1 神経系の模型図
時実利彦著「人間であること」P.17

「刺激を受け入れる働きを分担しているものを受容器（感覚器）といい、反応効果をおこす筋肉や分泌腺を効果器という。受容器と効果器を連結するのが神経系の働きで、その働きの違いで三つの役割（ N_1 型、 N_2 型、 N_3 型）に区別される。

N_1 型の神経系は、受容器（R）で受けとめた信号を、定められた仕組みで運動や分泌の指令に交換して効果器（E）へ伝える伝導器（ C_0 ）としての役割をしている。〔中略〕

N_2 型の神経系は、受容器で受けとめた信号を感覚し（S）、記憶（M）し、記憶されたものを足場にして感覚情報を処理し、その結果を運動や分泌の指令として送り出す情報処理、運動発現器（P）としての役割をしている。〔中略〕

N_3 型の神経系は、受容器から送りこまれた信号や、処理されて貯えられている印象を組み合わせて、全く新しい指令を作りあげ、これを効果器へ送り出す創造器（Cr）としての役割をしている」⁽⁶⁾

音楽反応では、 N_2 型と N_3 型があてはまると思う。例えば、人間が、音楽が聞えている時には動き、聞えなくなると停まるという活動を考えてみる。はじめに音が止めば停まる。音が鳴り出せば動くという約束が記憶されている。その状態で活動を開始する。そして音に対して反応する。あるいは、高い音が聞えたら身体を高く伸ばす、低い音が聞えたら小さくなるという情報が記憶されていて、音楽に反応する。これらの反応は変化する刺激に対して適応行動をしているので即時反応といわれている。これは身体反応の基本的訓練の一つであって、全ての訓練に含まれているものである。「この場合もフィードバックの仕組みによって情報処理や運動発現器の働き方がうまく調整されている」⁽⁷⁾と時実⁽⁷⁾は述べている。又、「 N_3 型の神経系は自分の行為と、自分が設定したものと違いが情報としてフィードバックされて、創造器の働きがよくなり調整されるのである。〔中略〕私たち人間だけが持っている N_3 型による創造行為は、明晰な意識のもとではじめて可能なことはいくらでもない」⁽⁸⁾。高度な音楽活動は全てこれにあてはめて考えることができる。演奏活動、身体での自由表現など人間の創造的活動がそうであろう。

私はこの三つの神経系に共通してみられるフィードバックの作用が抑制力と関係があると思う。「フィードバックは身体運動の過程において重要な意味をもつ。フィードバックとは、ある系が外界に働きかけるとき、その働きかけのぐあいを観測し、その観測結果によって、働きかけ方を目標に近づくように修正する一連の機構のことである」⁽⁹⁾ 更に、「学習の中心課題として、正しい反応の発見、正しい反応の定着、正しい反応の持続ということがあげられる。このような学習過程において重要な意味を持つてくるのがフィードバックである」⁽¹⁰⁾ 正しい反応の発見とその定着と持続ということについて身体反応を考え合わせてみる。ピアノの音楽の連続して鳴るアクセントに合わせて手を叩くという行動を仮定する。アクセントを聞いた瞬間に手も叩いた状態が正しい反応である。しかし、自分の反応が正しかったかどうかは、その瞬間瞬間にピアノの音と自分の手叩き音、掌の接触感覚、仲間の状態を視て聴いて確かめなければならない。この確認作業は、高度な精神的緊張と鋭敏な知覚能力が要求される。しかし、この訓練を続けるうちに、どうすれば正しい反応ができるかを考えるようになるだろう。そうして、アクセントに合わそうというはっきりした意識を持つようになり、更には、今の時点よりも先の時点に起るであろうことを予測するようになるだろう。この二つの能力が定着し持続させる為には、反復の練習により能力の残存時間を保つことであろう。また、くり返しの練習によってのみ高度な意識力と精神的緊張感は、アクセントと手叩きの時間的誤差を僅少にすることができると思う。

グラニットは「多数の非常に精巧で注意深く調整された運動は、少なくともその練習の初期には、完全に明瞭な意識下でなければ遂行できない⁽¹⁾。』と述べている。

それでは明確な意識や先を予測する能力は、神経系や脳のどこで起ってくるのだろうか。千葉によれば「意識とは自分にわかるということとなるだろう。〔中略〕脳機能の中で言語化された部分が意識（認識）されるということになる。意識の流れが思考ということになるだろう⁽²⁾』ということである。又、続けて「主体的、自主的な運動を起こすには、明確な自己内面での意志がなければならず、その意思を持つためには言語によって意味づけされなければならないということになる⁽³⁾』ということは、脳の言語中枢が重要な役割をもってくると思われる。

ヘルブラントの言を引用すると「意志による動きは2つの部分から構成されている。すなわち、1つは意図されているもの、あるいは皮質によってコントロールされているものであり、他の1つは、目的のある行為と関連して、自然的にひきおこされるもので、これについては内省することはできない。この原理の意味するところは、動きを意図すると、その動きはまず脳の思考センターで始められ、次に思考レベルの下にある神経系の活動機能によってうまく行われるということである。〔中略〕その調整の型は、観念および身体中のさまざまな感覚器官からの絶え間なく刺激の流れに反応して、中枢神経で作られる⁽⁴⁾。』時実によると「意志力は前頭連合野で営まれる。ほかの精神活動を推進するプラスの働きを持ったものと、逆に抑制するマイナスの働きをもったものがある。前者は推進力であって意欲とかやる気ということばで表現されている。後者は抑制力であって抑止力とか忍耐ということばで表わされている。』⁽⁵⁾「前頭連合野には将来を考える能力、時間的経過の体験、連続、順序づけの精神活動が営まれている⁽⁶⁾。』

以上、いろいろな意見を総合してみると、思考力や意志力は大脳皮質の活動であることがわかる。大脳皮質でも前頭連合野は人間としての存在を示す活動、すなわち、意思力、創造性、思考力、情操などをつかさどる所である。

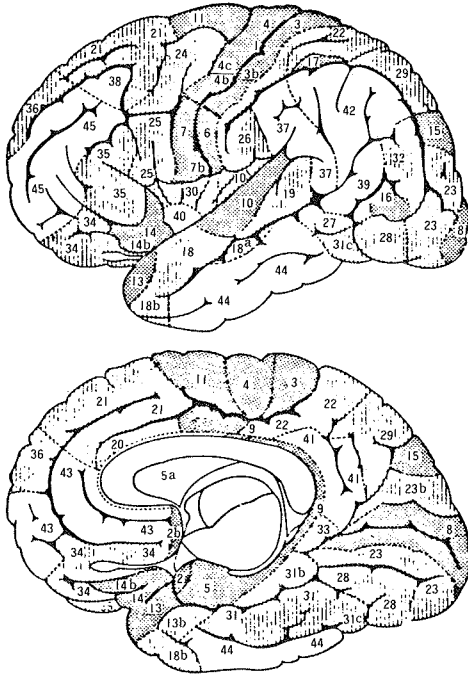
もう一度はじめの神経系の図式を考える。この三つの神経系はいずれもフィードバック作用を起こす。しかし、N₁型よりもN₂型においてN₂型よりもN₃型においてその作用は複雑になる。音楽身体反応においては、N₂型、N₃型のフィードバック作用であるが、特に高度な音楽反応、あるいは音楽活動においてはN₃型のフィードバック作用であろう。フィードバック作用には意志力、思考力、など高度な能力が必要とされる。この意志力のうちのマイナスの働きをするのが抑制力である。抑制力を養うことによってリズム感は育つかということである。考えられることは、意志力によって音に集中することが第一歩である。次に拍節に合わせることである。そして、それらの能力を基にして持続性を感じることを、ダイナミクスのピアノシモを表現することなどができるのである。身体表現や楽器での演奏表現、歌唱表現、指揮による表現、そのどれもが抑制力なしにはできない作業である。しかし芸術表現においては抑制力ばかりでは真の自己表現ができないので抑制と興奮の相反する状態が同時にバランスをとっておこなわれてこそ自己の内面の満足があると思う。

III 幼児の心身の発達と抑制力

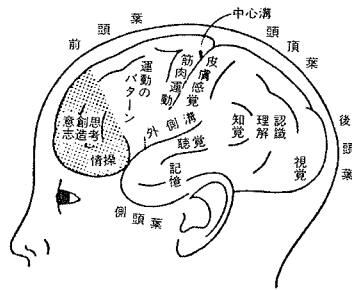
抑制力は前頭連合野での活動であることは前章で述べた。ここでは、幼児の前頭連合野の発達と身体的発達をあわせて考察する（図2及び図3参照）。

フレキシビの髄鞘化の順序を示す図によると、筋肉運動野と皮膚感覚の部分の発達が早くから始まっている。前頭連合野や後言語野は最も遅くれて発達し始める。時実によれば10才か

第2図 髄鞘化の順序を示す(P. E. Flechsig, 1920)



第3図 人間の新皮質の分業体制点をうった領域は前頭連合野



時実利彦著「情操・意志・創造性の教育」 p. 57, p. 127

ら3才までは主として前頭連合野以外の情報処理と運動動作発現の座にある神経細胞がシナプス連結によって配線されてゆくのである。4才以後10才までは主として前頭連合野の神経細胞が配線されるのである。前頭連合野で営まれる高等な精神である思考、創造、意志、情操が、4才ごろから働き始めることによって知ることができる⁽⁶⁷⁾。言語活動は3才ごろから語いも増え、文章による意志の伝達や、他人との会話もできるようになる。4才になると日常生活に不自由な言語生活ができる。身体的には4才をすぎると手足の発達がすすみ走る、跳ぶなどの運動も可能になる。社会性は2才ごろから友だちと遊べるようになり4、5才ごろになると自分からすすんで行動するようになってくる。時実によれば「特別に脳の病気でない限りは、私たちの前頭連合野は、3才をすぎると働きだしてくるのである。そしてこの働きは、4、5才ころからかなりはっきりしてくる。〔中略〕4才から5才の間に、それまでは椅子に坐らされた子どもが、自分で椅子に坐るようになり、また、その椅子をいろいろな道具として使うようになるのだという。前頭連合野の発達によってやる気が芽ばえてゆく……〔後略〕」と述べている。前頭連合野の発達は子どもの生活を大きく押し開いてゆく様子がわかる。

ここで前章で引用した「主体的行動をするには明確な意志を持たねばならず、明確な意志を持つ為には言葉による意味づけがなされなければならない⁽⁶⁸⁾。」という千葉の言葉を思い出してみる。子どもは言葉による思考が可能になり、自分の意志で行動するようになる時期、それは4才ごろからであろう。前頭連合野の発達により一段と能力的に飛跳し、あらゆるものを貪欲に吸収して行くのが4才児ではなかろうか。

幼児期における身体反応訓練は主として即時反応訓練である。刺激として出される音やア

クセント、休止などの変化に即座に指示されているように反応することである。この刺激の変化が多ければ多いほど、子どもの精神活動や身体活動は忙しくなる。このような質の高い活動が与えられるべきである。そうすれば、子どもの脳機能の活動は促進される、ということはシナプスの連結や配線が盛んにおこなわれることである。また身体的にも敏しょう性や平衡感覚を高めることができるのである。子どもは音に対して敏感になる。音を聴こうとする集中力が養われる。何はにおいても聴覚訓練が他の活動に先行するのは云うまでもない。即ち音楽反応における行動の第一歩は聴くことであるからだ。子どもは素足で走り、歩き、跳び、手を叩き、握り、楽器を叩き、こすり、指を使って歌遊びをする。まず子どもは肌で感じることを体験すべきである。手や指の使用は頭脳の発達を助長することは周知のことである。子どもは広い空間のあらゆる方向へ自由にステップする、高く跳び、低く這う。自分の位置と方向についての感覚を認知する事は、精神の広がりを感じさせるのである。走る、急に止まる、あるいは、上に跳ぶなどの急激な変化に身体のバランスを保つことができるようになる。このような活動には抑制力を必要とする。

Ⅳ 幼児のリズム練習の実践からの考察

これは過去2年間の実践記録である。

クラスは約10名から15名の成員で、子どもの平均年齢は約4才である。入級は3才からであるが、姉といっしょに入級して3才未満の子どももいる。3才ごろの子どもは母親と離されることに非常な不安をおぼえて、母親が居ないと落ち着かず、泣いたり、部屋を出てしまう子が居るので、全員の母親は同室内で見学したり、いっしょに活動したりする。週60分の授業である。経験月数がまちまちであるのは、3ヶ月ごとの登録更新であるため、その都度、入級退級がある。

表1 幼児の活動状況

幼 児	年 令	経 験 年 数	返 事	名前 の返 答	歩 行 走 行	ゆっくり の歩 行	ギャロップ	スキップ	リズ ムパ ターン 1 做 模	リズ ムパ ターン 2 做 模	リズ ムパ ターン 3 做 模	「アイ アイ」 動作 模 做
1 男	才 月	ヶ月	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×
2 女	2 : 08	3	○	×	×	×	△	×	×	×	×	△
3 女	3 : 02	3	○	×	×	×	○	×	×	×	×	△
4 女	3 : 06	6	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○
5 女	3 : 08	2	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
6 女	3 : 08	6	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×
6 男	3 : 09	5	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△
7 女	3 : 10	12	○	○	×	×	○	○	△	△	△	△
8 女	3 : 10	12	○	○	×	×	○	○	△	△	△	△
9 女	3 : 10	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
10 女	3 : 11	6	○	○	×	×	○	×	△	×	×	△
11 女	3 : 11	3	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
12 女	4 : 00	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
13 女	4 : 00	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14 女	4 : 02	4	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
15 女	4 : 02	6	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×
16 女	4 : 03	12	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○
17 女	4 : 03	6	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○
18 女	4 : 03	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19 男	4 : 04	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20 女	4 : 04	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21 女	4 : 07	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
22 女	4 : 10	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
23 男	4 : 11	6	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
24 女	5 : 00	24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
25 女	6 : 01	6	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○

(註) ○……できる △……時々できるが、確実性に欠ける ×……できない

表1に取りあげている訓練内容は、平常の種々な訓練の中から基本的なものと、特に抑制力を必要とすると思われるものを抽出してある。

訓練1：お返事。円座になる。教師がタンブリンで拍打ちしながら、ひとりずつ子どもの名前を呼びかけ、それに対して、子どもが答える。

「リカちゃん？」「ハイ！」

タンブリン || ↑ ↑ ↑ ↑ || || ↑ ↑ ↑ ↑ ||

分析： 拍を感じて聴き、拍にのって答える。4拍ごとの型を感じとらせる。全員が途切れずに続けさせることで、リズムの持続性を感じとらせる。

感想： 全体的傾向として、年齢が低いことと、経験月数が短いと当然のことであるが正答は少ない。しかし3ヶ月するとだいたいの子どもはできるようになる。

幼児3は3才0ヶ月で入級したがすぐに正答できた。

幼児2, 幼児6は3才0ヶ月ですぐに正答できた。1才頃から姉のレッスンの同行して授業を見学していたからだと思う。

訓練2：名前の返答。円座になる、教師がタンブリンの拍打ちをしながら、ひとりひとりに呼びかける。

教師 「あなたはだーれ？」

|| ↑ ↑ ↑ ↑ ||

幼児 「よしのまさえです！」

|| ↑ ↑ ↑ ↑ ||

分析： 拍を感じて聴き、自分の名前を拍にのせて言う。

全員が途切れずに言ってゆくことで拍節と持続性を感じさせる。

感想： 3才では自分の姓名をいえる子どもは半数ぐらいである。6ヶ月以上の練習で答えられるようになる。訓練1, 2は、拍のまとまりを聴くことに抑制力が要求されると思う。

訓練3：歩行, 走行, 停止：

子どもたちは広い室に入ると喜々として走りまわる。教師はその速度に合わせてピアノを弾き出す。時々、アクセントをつけたり、止ったりして変化をつけて、ピアノの音に注意を向けさせて行く。ピアノの音に注意するようになると歩行のテンポにしてゆく。

便宜的に速度をメトロノームで示すならば、♩ = 208—200がおおよその走る速度である。しかし、子どもたちのその日の気分で速度は変化する。歩行の速度は♩ = 112—108ぐらいである。

ゆっくりの速度の歩行は非常に注意力と両肢のゆっくりした運びが要求されて、幼児の両肢の長さでは難しい。しかし♩ = 40ぐらいの速度も経験させるべきである。停止は、動く事と対象させて体験させるべきである。幼児は動き出すと興奮してきて疲れるまで活動を止めない傾向がある。音に注意を向けさずにも無音状態を作ることが大切である。幼児は急に停止することで抑制力と小脳の機能による自動制御で平衡をとって止まることを体験することができるのである。

音を集中して聴くということは、精神の集中力を養う。動いていて音が止まれば即時に止まり、音が鳴り出せば即時に動くという即時反応訓練は聴覚の集中力を養い

また神経系と筋肉系の調整力と、敏しょう性を養う。また、先を予測する見越し能力が育って来る。これは抑制力を育てるのによいと思う。

感想： 幼児2は3才2ヶ月で「ぞうさん」をうたいながらゆっくりとボール送りができた。幼児6は3才0ヶ月で、おおよそ、J=60の速度に合わせて正確に歩いた。3才から訓練を始めて10ヶ月から12ヶ月経つと、急にゆっくりした速度に合わせられるようになる子どもがかなりみうけられる。抑制力が育って来ているためであろうかと推測する。

訓練4：ギャロップとスキップ（ターナリースキップ J♪）

3才児でスキップのできる子どもは稀である。

ギャロップへの導入は、少し速い歩行をさせていて、ピアノではギャロップのリズムを弾き、掛声をかけて「ヒョイヒョイ」とか「パッカパッカ」とかいて調子をつけてあげると、子どもははずみをつけて上に浮きあがるように身体を使い、次第に高く上体を持ち上げるようにしてギャロップができるようになる。

感想： スキップは片足をステップホップと二度使うので難しい。殊に、3才、4才では下肢の筋肉もまだ十分に発達していないから長時間の練習はさけるべきであろう。スキップの速度はゆっくりと、子どもが両肢の調整に真剣になっているのにできるだけ合わせてあげるように留意すべきである。スキップができるようになると子どもにとっては大きな世界にとびこんだほどの喜びを感じている。跳ぶ動作は自分の身体の重量を感じさせられ、着地するときは衝激が全身に伝わる。これが快感となるようである。スキップができるようになるとすぐに、子どもは自己を自覚し性格的に急に成長するようである。

訓練5：リズム型：タンブリンでリズム型を叩くのを聴いてから、カスタネットでまねる。

|| J J J | || || J J J | ||
|| J J J | ||

分析： 拍を感じながら4拍のまとまりを感じる。

4拍のまとまりを聴いてから、今聴いたのをすぐに模倣する。

感想： 「4拍のまとまりを聴く」ということが難しい。教師がリズムを叩き出すと同時に叩き出してしまう子どもが殆んどである。練習をくり返すことにより次第に、4拍を最後まできけるようになる。4拍のまとまりを聴くということをして得させることは、意志力を持たせることになると思う。

3才児では、指や手首の細かい動作がまだ正確にできにくい。従って、4分音符に挟まれた8分音符は、4分音符として叩いてしまう。

リズム打ちを、あいさつ言ばや、花や昆虫、動物などの名前を唱えながらすると、かなり正しく叩けるようである。4拍の型になれてくると、8拍のまとまりのリズムを名詞と動詞を連いだ簡単な文を唱えて叩かせることにより、フレーズ感を感じさせる。

感想： 集中して聴けない子どもは正確に叩けない。全員いっしょに叩かせることと、ひとりずつ叩かせることを交互にやらせることにより、子どもの集中力を高めることと、正確さを求めるために必要である。

訓練： 「アイアイ」相田裕美作詞，宇野誠一郎作曲 の歌唱とジェスチャー。

この曲は子どもたちの好んで歌うものである。アイアイの音の響き、歌詞の内容がひょうきんなおさるさんを想像させるのか子どもの心情に合うようである。身体でのジェスチャーが子どもにとって面白く思われるようである。

「アイアイ」 \parallel ♩ ♩ \parallel の2拍を聴くことができることが重点である。

ジェスチャー^{アイアイ}をやることで、身体表現の練習をする。即時にいろいろなポーズをすることで創造性を養う。

感想： 「アイアイ」という2拍を聴けない子どもがあるが、よく説明して練習するとできるようになる。

自分がリーダーになってジェスチャーをやりたがるようになる。また、人前でやるように仕向けるとよいと思う。はじめはジェスチャーも型通りになってしまうが、指導によって方向を変える。顔の表情を変えるなどして表現方法を工夫させる。

この活動の中には、見ながら聴き、それを記憶するという活動が同時に行われる。

これは頭脳の広い皮質の活動を促すものである。

以上の実践を通して、全ての活動が身体と同時に精神的活動であるということが云えるのではなかろうか。

V 結 語

リズム感を養う訓練は、全身を用いて行われるべきである。即ち、それは脳や神経細胞の活動を促進することであるからだ。殊に、幼児期の脳の発達の著しい時期にこのような訓練をするということは、最も適当なことであると思う。訓練の過程に於て精神的、身体的両方の抑制力が要求される。そして、特に幼児期にこのような訓練をすることによって、リズムにのれない、あるいは、リズムを感じないという、A-Rhythmの子どもをなくすることができると思う。ジャック＝ダルクローズは、9才までに子どもはリズム訓練を受けるならば、リズム不感症にはならないと述べている。リズム訓練による能力の発達は、単に音楽的能力を引き出すにとどまらず、精神の集中力、神経組織と筋肉組織の調整力、反射反応能力（敏しょう性）、記憶力、想像力、抑制力、創造力など人間として生きていく上に必須の能力を培うことができる。また精神的な開放感を味わわせることができ、協調性、社会性も培うことができると考える。

引用文献

- (1) クラーゲス; リズムの本質 みすず書房 p. 16
- (2) (1)に同じ p. 51
- (3) (1)に同じ p. 67
- (4) ジャック＝ダルクローズ; リズムと音楽と教育 全音出版社 p. 39およびp. 63
- (5) 時実利彦; 人間であること 岩波新書 p. 17
- (6) (5)に同じ p. 17ーp. 18
- (7) (5)に同じ p. 18
- (8) (5)に同じ p. 20
- (9) 体育心理学; 大修館書店 p. 210
- (10) (9)に同じ p. 210
- (11) グラニット; 目的をもつ脳, 海鳴社 p. 148

- | | | |
|------|-------------------------------|---------------|
| (12) | 千葉康則; 行動科学とは何か, NHKブックス | p. 110—p. 111 |
| (13) | (12)に同じ | 第 4 章 |
| (14) | シュワイジングード; 動きの教育 杏林書院 | p. 160 |
| (15) | 時実利彦; 情操, 意志, 創造性の教育 第 1 法規出版 | p. 191 |
| (16) | (15)に同じ | p. 133 |
| (17) | (15)に同じ | p. 137—p. 138 |
| (18) | (15)に同じ | p. 148 |
| (19) | (13)に同じ | |